

- 129 (古代においては) 灰を吹いて、その灰の飛び散り具合で気候を推しはかり、北斗七星の柄の指し示すところによって、天の運行や季節の変化を知ったものだが、(今の私は) 都から引き離されて、ますます(時節のみならず) 時勢との隔たりも深くなり困窮している。京の家族からの手紙も途絶えて、家族の様子も分からない。私の体は痩せて帯がゆるくなり、紫の官服も色あせて、それを見ては涙がこぼれる。鏡を照らして、そこに映った白髪頭を見ては嘆き悲しむ。
- 135 この太宰府で一人もの思いにふける様は(あたかも) たった一羽で雲を押し分け飛んでゆく雁のように切なくわびしいものだ。
- 136 私の泣く声は、秋風に吹かれて木肌にしがみついて寂しい声で鳴いている、つくつく法師のようだ。

語釈

129 ○「灰」・「律候」：柳澤良一氏はこの二語を次のように説明する。

「灰」は気候の測定に用いた器具である。「灰管」のなかに置かれた灰のこと。「律候」は気候の移り具合のこと。昔、葭苧(葦の茎の中にある薄い膜)の灰を十二律の各律管(灰管のこと。本来、音律を定める管)に入れて、その灰の舞い上がり具合の変化で時節の到来を測定した。

(『菅家後集』注釈編「十四」金沢学院大学紀要第五号198頁)。

130 ○斗建：斗柄が左旋して指す辰をいう。斗柄の指す十二辰を十二か月に配するのを「月建」といい、大の月を